

令和2年度企画展
シリーズ ミュージアムとの創造的対話03 何が価値を創造するのか？
開催要項

1. 企画概要：

鳥取県立博物館は、昭和47年の開館以来今日まで、調査研究に基づく資料の収集や展覧会及び教育普及プログラムを通して、文化芸術を保存し、次世代へ継承していくための活動を行ってきました。これをさらに広げ、これからのミュージアムの可能性を開く試みとして、2017年にシリーズ展「ミュージアムとの創造的対話」を開始しました。本シリーズでは、ミュージアムを巡る問いを契機に、国内外の優れたアーティストによる実験的で多彩な表現を展示室の内外に展開させることで、思考を促し、人やモノ、場との対話を重ねながら、その現代的な意味を探ることを目的としています。

第3回目の今回は、ある個人コレクターのコレクションと、收藏アーティストによる新旧作の展示を通じて、美術作品における「価値」とは何か、それはいつどのように作られるのかについて考察します。「アーティスト」たちは、自らのアイデアや知見を頼りに、様々な素材を用いて作品を制作し、新しい「価値」を提示する存在です。一方、「ミュージアム／美術館」は、作品を展示したり收藏したりすることで、歴史的あるいは美学的な価値を認め、その作品の価値を定め、時には高める役割を果たします。「コレクター」もまた、作品に何らかの価値を見出し蒐集する点でミュージアムの姿と重なりますが、その動機や基準、目的は様々です。とりわけ同時代の作品をコレクションすることは、時代を先駆ける価値づけの行為とも言え、あるときは作品の理解者として、またある時は作家の経済活動を支えるパトロンとして、大きな社会的役割を担ってきました。本展で紹介する「A コレクション」は、1980年代から日本の現代アートを中心に収集が始まり、現在では数百点にのぼります。特徴的なのは、数十年にわたって特定の作家の活動を観察し続け、作品購入を通じた支援だけでなく、作家活動のアーカイヴやプロジェクトへの参画まで活動を広げていることです。

本展では、この秘蔵のコレクションを展示し、約30年にわたる収集活動の成果を公開することで、1980年代から2010年代にかけての日本の現代美術の歩みの一側面を紹介します。同時に、「コレクション」という集合体をめぐる価値創造のプロセスと現場を検証し、その可能性と課題について考える契機とします。

2. 会期・開館時間：

令和2年11月28日（土）～12月27日（日） 午前9時～午後5時
※休館日：12月14日（月）

3. 会場：

鳥取県立博物館2階 第1～第3特別展示室
倉吉サテライト会場 ・Aコレクション・ストレージ（倉吉市和田東町121-1）
・株式会社丸十（倉吉市秋喜350-23） ※土日のみ開場

4. 料金：

600円（前売り・20名以上の団体・大学生・70歳以上の方：400円）
※倉吉サテライト会場は無料

5. 出品作家：

原口典之、村岡三郎、松澤宥、渡辺英司、大塚泰子、小林正人、竹川宣彰、藤澤江里子ほか

6. 関連事業：

①オープニング・アーティスト・トーク

11月28日(土) 午後2時～ 出演：渡辺英司、大塚泰子、藤原勇輝、竹川宣彰ほか
会場：展示室ほか博物館内

②ゲスト・トーク「文化芸術と価値創造について」

12月5日(土) 午後2時～3時半 ゲスト：池田修(NPO法人BankART1929代表)
会場：Aコレクション・ストレージ

③レクチャー「作家亡き後に作品を再設置すること」

12月13日(土) 午後2時～3時半 講師：尾崎信一郎(鳥取県立博物館副館長)
会場：講堂

④特別講演会「コレクションとアーカイヴー松澤宥・村岡三郎・原口典之を例に」

12月19日(土) 午後2時～3時半 講師：松本透(長野県信濃美術館長)
会場：講堂

⑤学芸員と巡るギャラリー・ツアー

12月27日(土) 午前10時～午後4時半 会場：第1～3展示室および倉吉サテライト会場

7. 主催：

「創造的対話展」実行委員会(鳥取県立博物館、山陰中央テレビジョン放送株式会社)

8. 協賛：

日本通運、株式会社モリックスジャパン、株式会社吉備総合電設、三和商事株式会社、鳥取県情報センター

9. 協力：

株式会社丸十、倉吉運送、KENJI TAKI GALLERY

10. 問合せ先：

鳥取県立博物館 美術振興課 赤井あずみ (TEL. 0857-26-8045)

令和2年度企画展
企画展「生誕110年 岡本太郎——パリから東京へ」
開催要項

趣 旨：

本展覧会は、生誕110年を迎える岡本太郎（1911-96年）に焦点を当て、その思想や作品の素地を培った戦前のパリ時代と、多岐にわたる活動を繰り広げた帰国後の東京での動向を照応させて展覧し、パリで育んだ前衛芸術家との交友と戦後日本において主導した芸術運動の関係を検証しようとするものである。

岡本太郎は、1930年に渡仏し、以降10年にわたってパリに滞在して絵画の研鑽を積んだ。早くも1933年には、ハンス・アルプやカンディンスキーらが所属していた前衛芸術家の団体「アプストラクシオン・クレアシオン協会」に参加し、同地にて優勢であった抽象絵画を牽引する芸術家らと親しく交流している。岡本はとりわけクルト・セリグマン（1900-62年）と親交を深め、造形の上でも類似性が認められる。二人は「ネオ・コンクレティスム（新具象主義）」を標榜し、「ネオ・コンクレティスム」はセリグマンの来日を通じて日本でもリアルタイムで紹介された。下郷羊雄や鬘光、阿部展也といった作家の一部の作品にその解釈と実験の過程を読み取ることが出来る。

大戦後、岡本は東京を拠点として活動を再開し、精力的に絵画制作を進めるかたわら「夜の会」をはじめとするジャンル横断的な団体の結成に深く関わり、とくに新人作家のあいだで強い存在感を示した。同時に岡本は戦前のパリで知遇を得た作家との交友をもとに、いくつかの展覧会を企画し、戦後日本における美術の動向に大きな影響を与えた。本展覧会の後半では、ニューヨークに拠点を遷していたセリグマンの選出によるアメリカ人作家の作品を加えた「第3回読売アンデパンダン展」（1953年、東京都美術館）と、ジャン・フォートリエ、カレル・アペル、カポグロッシらの作品を紹介した「世界・今日の美術展」（1956年、日本橋・高島屋）などのメルクマールとなる展覧会を取り上げる。これらを契機として国内ではアンフォルメルや抽象表現主義といった同時代の欧米における美術への関心が深まり、例えば吉原治良が率いる具体美術協会の活動として結実した。本展ではこれまで必ずしも十分に解明されていなかったオーガナイザーとしての岡本の役割をいくつかの展覧会との関係において検証し、あわせてパリ時代からの民族学・社会的な関心のもとに全国の土俗的な文化を取材した一連の仕事も紹介する。

展示構成：

第I部 パリでの土壌形成

- 第1章 セリグマンとの親交：アプストラクシオン・クレアシオンからネオ・コンクレティスムへ
- 第2章 シュルレアリストとの関わり
- 第3章 日本におけるネオ・コンクレティスムの受容

第II部 オーガナイザー・岡本太郎の誕生

- 第1章 東京における活動の展開
- 第2章 欧米の前衛芸術の紹介とその反響
- 第3章 「芸術は呪術である」——日本美術の再発見

会 期： 令和3年2月11日（木・祝）—3月21日（日） ※34日間／月曜日休館

会 場： 鳥取県立博物館 第1・第2特別展示室

主 催： 「岡本太郎展」実行委員会（鳥取県立博物館、日本海テレビジョン放送株式会社）、読売新聞社、美術館連絡協議会

協 賛： ライオン、大日本印刷、損保ジャパン、モリックスジャパン、吉備総合電設、三和商事、鳥取県情報センター

企画協力： 川崎市岡本太郎美術館

協 力： 岡崎市美術博物館、The Seligmann Center of the Orange Country Foundation, Inc., Weinstein Gallery, Yale University, 日本通運、その他

入 場 料： 一般800（20名以上の団体600）円

会期中の関連事業（予定）： 特別講演会、ギャラリートーク、アートシアター等

担 当： 鳥取県立博物館 尾崎信一郎（副館長） E-mail：s-osaki@pref.tottori.lg.jp
友岡真秀（学芸員） E-mail：tomookam@pref.tottori.lg.jp
〒680-0011 鳥取市東町二丁目124
電話 0857-26-8045 ファクシミリ 0857-26-8041